

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 原因・理由を表す複合的な接続表現の史的研究
氏名 馬 紹華

本研究は日本語の複合的な原因・理由表現の意味形成及び意味変化を通時的な観点から考察したものである。複合的な原因・理由表現に関しては、個々の形式に関する共時的な研究はあるが、本研究では体系的に複合的な原因・理由表現の変遷を捉えることを目的とする。本研究は、序論・本論3部・結論の5つの部分から成る。

序論では、古代語から現代語にかけての原因・理由表現の研究史を概観し、その課題を指摘した。また、本研究における原因・理由表現の分類を行い、問題意識及び研究目的、方法などを述べた。

第1部「上代～中古の複合的な原因・理由表現の研究—順接・逆接—」：上代語「からに」と「ゆゑ（に）」は原因・理由表現（順接）でありながら、逆接に用いられることがある。この順接・逆接問題を着眼点に「からに」「ゆゑ（に）」「ものゆゑ」「ものから」の意味記述を行った。

① 「からに」

上代語「からに」は、「ただ一夜隔てしからにあらたまの月か経ぬると心惑ひぬ／訳：ただ一夜逢わなかつた {がゆゑに／のに}、一ヶ月が経つほど心が惑った」（万葉・巻四・638）のように、順接にも逆接にも解釈される。これについて、「一夜を逢わないことによって一ヶ月が経つほど心が惑わない」ことは一般的期待であり、「一夜を逢わないことによって一ヶ月が経つほど心が惑う」ことは例外的期待であると位置づけられる。この和歌における現実と一般的期待とが対立することから逆接の意が生じ、同時に、現実と例外的期待とが一致することから順接の意が生じたと説明した。

② 「ゆゑ（に）」

上代語「ゆゑ（に）」は逆接を表す場合、「はなはだも降らぬ雪ゆゑこちたくも天つみ空は雲らひにつつ」（万葉・巻十・2322）のように、「ゆゑ（に）」の上接語に打消表現を含む修飾語句が現れるという特徴がある。一般的期待は「はなはだしく雪が降れば、雲が空いっぱい広がる」ことであるが、歌の現実「雪ははなはだしく降らなかつた、雲はいっぱい広がった」であるため、一般的期待の前件（＝はなはだしく雪が降れば）と現実の前件（＝雪ははなはだしく降らなかつた）とが対立することから、逆接の意が生じたと説明した。

③ 「ものゆゑ」「ものから」

この2語は、成立年代や構成要素が類似することから類義表現だとされることが多い。しかし、「ものゆゑ」は上代には逆接を表していたが、中古以降次第に順接を表すようになる。「ものから」は前件と後件とが対立する内容であるから逆接と解釈されるもので、近世以降に順接を表すようになる。加えて、「ものゆゑ」「ものから」の順接用法を記述し、2語で意味特徴が異なることを指摘した。

以上、第1部では、「からに」「ゆゑ（に）」が逆接を表す論理の違いを分析した。この違いを意味特徴から考えると、「からに」は後件が蓋然性の低い事態であるのに対して、「ゆゑ（に）」は前件が一般的な因果関係の前件と相反する事態であるという結論を得た。

第2部「中世～近世の複合的な原因・理由表現の研究—事態の望ましさ—」：中世～近世における、望ましくない事態の原因・理由を示す「せいで」「ばかりに」、望ましい事態の原因・理由を示す「おかげで」の成立について考察した。

① 「せいで」

漢語「所為」は元々「行為、行動」を表し、平安時代の古記録・古文書には「(事態)ハ(主

体)ノ所為ナリ」の構造を取る用例が多くある。例えば、「但御誦事、女房之所為也」(中右記)において、「事態」=「主体ノ所為」の関係が成り立つ。次に、「事態」と「主体ノ所為」の間に因果関係が読み取られる用例が見られる。さらに、「主体」の位置(波線)に意志性のない事柄(出来事)が現れると、「事態」と「主体ノ所為」の関係は完全に「結果」と「原因・理由」になる。例えば、「而仰詞無之、未練所為歟」(猪隈閑白記)は、「指示の詞が無く、これは未練(仕事に慣れていないこと)が原因であるか」のように理解される。このように、「所為」は原因・理由用法を獲得し、音韻変化を経て江戸時代に「せいだ」になる。明治以降、文末用法から文中用法が派生し、「せいで」が成立する。

② 「ばかりに」

本来、「ばかり」は前接の目的を限定する意味用法を持つ。近世では「ばかりに」の上接語に意志・願望を表す「う／よう」が現れる。これにより、「ばかりに」の前件は目的にも原因・理由にも捉えられるようになる。例えば、「穿鑿せうばつかりに、今日のはる／＼来ました」(卯月の潤色)は、「詮索{するために(目的)／したいから(原因・理由)}今日は遙々来た」の両方に理解される。「う／よう+ばかりに」の勢力が拡大するにつれ、上接語に「う／よう」がなくても「ばかりに」の前件が原因・理由を表す用例が現れる(「殿を支たばつかりに〔ので〕御本望も遂られず、…殿はやみ／＼御切腹 仮名手本忠臣蔵)。このように、「ばかりに」は目的を限定する用法から、目的と原因・理由の両方に捉えられる段階を経て、原因・理由用法を獲得する。

③ 「おかげで」

語源となる「かげ」は中古において、「花や木などのかげ」の意味から「庇護」の意味を派生し、「この御蔭〔貴人の庇護〕に隠れて過ぐいたまへる年月」(源氏物語)のように用いられる。これは古代では花や木の繁茂をしばしば一族の繁栄に重ね合わせたところから生じた意味変化だと考えられる。この「庇護」の意味には「恩恵」のニュアンスが含まれ、近世になると「仏のお蔭」「婿のお蔭で」のような「恩恵」を表す「おかげ」が多く見られる。さらに、「あのお蔭のお蔭で大分よい人がございますから」(浮世風呂)のように、「恩恵」の与え手の位置に事柄や出来事が現れることによって、「おかげで」は原因・理由表現として捉えられるようになった。

以上、第2部の考察から、この3語の原因・理由用法の成立は上接する語の変化によってもたらされたものであるという共通性を持つことが明らかになった。

第3部「近世～近現代の複合的な原因・理由表現の研究—判断の根拠—」:近世～近現代における、判断の根拠を表す「うへは」「からは」「からには」「以上(は)」の意味用法及び形式間の相違について考察を行った。

① 「うへは」

現代語「うへは」は判断の根拠しか表せないが、中世語「うへは」には判断の根拠と事態の原因・理由の両方の用法がある。これについて、形式名詞「うへ（上）」の累加用法から「うへは」の前件に「ある段階に達した状況で、それを踏まえて」という意味合いが生じ、これに基づいて「うへは」の後件には判断でも出来事でも現れることが可能だと述べた。時代が下ると前の出来事と後の出来事に因果関係が存しても、直接「うへは」が用いられるのではなく、間に判断を表す語句を介する用例が現れる。これにより、「うへは」は次第に判断の根拠を表すようになる。

② 「からは」

近世語「からは」が表す判断の根拠は、さらに説明の根拠と行動の根拠に分けられる。前者は「からは」の後件が強い断定であることが多いのに対して、後者は「からは」の後件が意志・願望・義務であることが多い。説明の根拠を表す「からは」は中世「うへは」の意味特徴に近く、行動の根拠を表す「からは」は現代語「からには」「以上（は）」の意味特徴に近いことを述べた。すなわち、「からは」の意味特徴は「うへは」「からには」「以上（は）」の中間的なものと位置付けられることを論じた。

③ 「からには」「以上（は）」

この2語は類義語でありながら、置き換えられない場合がある。「からには」は前件が必ず確定的事態であるのに対して、「以上（は）」は確定的・仮定的事態の両方が来ることができる。一方、「以上（は）」の構文には常に対照的含意が読み取れるのに対して、「からには」の構文にはそれが読み取れる場合と読み取れない場合がある。確定的事態と対照的含意という2つの意味特徴が揃う場合においてのみ、2語が置き換えられることを明らかにした。

以上、第3部の考察を通して、「うへは」「からは」「からには」（「以上（は）」）には判断の根拠を表す形式としての共通点と、後件に示される判断における相違点があることが確認された。

終章では、本論の3部で扱った原因・理由表現とその時代の主要な原因・理由表現との関連性について考察し、古代語から現代語にかけての原因・理由表現が表す因果関係の捉え方の変化を分析した。日本語の原因・理由表現は因果関係の種類によって「事態の因果関係」を表すものと「判断の因果関係」を表すものの2種類に分けられる。本論の第1部、第2部で扱った「からには」「ゆゑ（に）」「せいで」などは「事態の因果関係」を表すもので、第3部で扱った「からには」「以上（は）」などは「判断の因果関係」を表すものである。これらの形式を見ると、古代語の原因・理由表現は主に「事態の因果関係」を表し、「判断の因果関係」を表すものは近世以後に発達する。とりわけ、「うへは」は「事態の因果関係」から「判断の因果関係」へ移行する例であり、その変化は象徴的である。つまり、古代語から近代語にかけて、日本語の原因・理由表現が表す因果関係の捉え方は「事態の因果関係」から「判断の因果関係」へと拡張したとすることができる。